



## 幾多の災害を経験してきた京都 世界へ発信する技と知

### 大窪 健之

立命館大学総合理工学院 理工学部教授

工学博士。1968年生まれ。1993年京都大学大学院修士課程修了。2002年から同大学大学院地球環境学堂助教授。2003年から立命館大学COE推進機構特別招聘教授を兼任した後に現職。趣味は、登山や社寺の拝観・ツーリング。京都市内を縦横無尽に走り回る。学生時代は、新旧の建築見学や、仲間と設計競技への応募で過ごす。文部科学省が重点支援するグローバルCOEプログラムに選定された「歴史都市を守る「文化遺産防災学」」推進拠点のリーダー。

**R** +R 未来を生みだす人になる。  
**立命館大学**

立命館大学  
RITSUMEIKAN  
http://www.ritsumeiji.jp

2 008年2月10日夜、韓国の国宝第1号である南大門（崇礼門）が出火。わずか5時間で2階部分が完全に焼け落ちてしまった。「周囲は道路にもかかわらず、消防側は文化財を適切に消す方法が分からない。保存する側も焼けた時の対処法がなかった。こんな悲劇を絶対に繰り返してはいけません」

これはそれぞれその岸の火事ではない。わが国では近い将来の大規模地震が予測されており、国宝や重要文化財が集中する京都でも、その多くが震度6強以上になるといふ。すでに清水寺などで地域一体の防災体制が進められているが、これと並行して「歴史都市を守る文化遺産防災

学」に取り組んでいるのが大窪健之だ。

「阪神・淡路大震災の現場で、この自然災害は人間の長い労苦を一瞬で壊滅させると痛感。だから、少しでも被害を少なくする『減災』の発想が大切。それなら明日から出来ること、地域あるいは一人でも出来ることがある。それを積み重ねることが、実は最も確実な防災なのです」

今の目標はアジアを中心とした各地でも応用出来る災害対策のパッケージ・プランの作成だ。様々な文化風土や状況に合わせて、最適な「減災」対策を選択出来るという壮大な試みだが、既にユネスコ認可で文化遺産防災の国際研修を実施しているという。

「阪神・淡路大震災の時には、消防車が到着しても水道が機能しなかった。その経験が教えたのは、地域に根ざした水路や井戸などの水源の重要性です。今では都市インフラの発達で衰退しましたが、災害対策の機能を付加すれば、かつての水と緑の環境も再生可能。そうした美しい街は防災的にも安全な街になるわけです」

では質問。文化遺産が燃えていたら、水をかけて消そうとしてもいいのだろうか。

「ためらって焼けたら絶対に再生出来ないの、最小限濡れて済むなら良しとすべき。適切な判断力も含めて、文化遺産の保存と防災に寄与する専門的な人材育成も私たちの課題なのです」